文化の話題

オカタケの 文学館へ行こう！ ⑮

群馬県立土屋文明記念文学館
言葉が目に沁みていく

岡崎　武志

群馬県立土屋文明記念文学館へ行ってきた。公共交通機関を使ってのアクセスはやや不便で、JR高崎駅からバスに乗ったが、平日の開館時間帯には2本しかなく土日祝はなし。私は事前に調べて10時35分西口発の群馬バスに乗った。最寄りの停留所「保渡田」へは20分ほどだが、ちょっとした小旅行気分。

7月10日から9月20日まで企画展「宮沢賢治」を開催中の同館は1996年にオープン。まず常設展からじっくり見た。歌人で万葉研究に功績のあった土屋文明だが、私には親指の腹に書けるぐらいの知識しかなかった。しかし懇切丁寧に生涯と仕事を紹介し、和歌全体の歴史をも包括する常設展に多くを教えられた。

100歳まで生き歌作した巨人

円形に展示されたスタイルが斬新だ。外周が土屋文明、内周の外側では時代別の短歌史をたどる。中心にあたる個別の部屋もやはり円形で、壁をぐるりと万葉から現代まで36名の歌人の代表歌と当人を模した人形が展示され、これが何とも見事な出来だ。幾度も見入り、私はしばらく立ち去りがたかった。

さて土屋文明だが1890年生まれで1990年に死去。つまり100歳まで生き、晩年まで歌作を続けた巨人である。文学館が建つ保渡田が生誕地で養蚕農家に育った。刻苦勉励し上京ののち東京帝国大学へ進学する。貧しさをはねのけて和歌の道へ邁進し、そのまま歩みを止めなかった。

「小工場に酸素熔接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす」は大正期の歌だが、都市生活者としての社会意識が強く出た異色の作。明治に入り、鉄幹・晶子、子規などにより短歌は革新が叫ばれた。新しい波の渦中にあった文明も「短歌は生活そのものである」と考えていた。

歌誌『アララギ』の中心人物となり選者を長く務めるなど、後進への指導も怠りなく、短歌に生涯を捧げたことが展示でよく分かる。館内には東京・南青山旧宅の書斎を復元、窓から見える庭の木も移植された。90を超えてなお588首を歌集に収める精力ぶりで、文化勲章をはじめ多くの栄誉も得た。私には円形の展示のごとく、美しい環を閉じた人生のように思えた。

企画展「宮沢賢治」についても触れておこう。入り口に特別館長・小笠原祐治による「あいさつ」がまず来館者を出迎える。そこでコロナ禍に触れ「このようなとき、人間は、否応なく自分の生き方や社会のあり方について真剣に向き合わざるを得ません」とあった。その実践者こそ宮沢賢治であった。青い壁に大書された「誰だって、／ほんたうにいいことをしたら、／いちばん幸せなんだねえ。」（『銀河鉄道の夜』）の言葉がいつもより目に、胸に沁みていく。

賢治と関わり群馬の文学者

ところで、なぜ群馬で賢治が……と疑問を抱く人もあろうが、実は群馬の文学者たちと関わりがあった。無名の宮沢賢治の発見者である詩人の草野心平が前橋に移住したことで、前橋生まれの詩人・高橋元吉と伊藤信吉は賢治の文学と出会う。また、賢治は前橋生れの萩原朔太郎から影響を受けていた。

高橋元吉は同地に今も営業を続ける書店「煥乎堂」の社長を務めていた。空襲で書店が全焼した時、「雨ニモ負ケズ」の一節「アラユルコトヲ　ジブンヲカンジョウニ入レズニ　ヨクミキキシワカリ」を念頭に社員を励まし続けたという。言葉には力がある。そのことを教えるのも文学館の役目であろう。

私はこの解説文に感動し、急きょ予定を変更、文学館前から出ている前橋駅行き関越交通バスに乗り「煥乎堂」（前橋市本町）を訪ねてきた。この書店ビルの3階がワンフロア丸ごと古書売り場となっている。郷土関係のコーナーにはちゃんと土屋文明の著作や研究書が多数並んでいた。当たり前かもしれないが、何だか、少しほっとしたのである。

（おかざき・たけし　ライター・書評家）

群馬県立土屋文明記念文学館

「土屋文明―その作品と生涯―」

「三十六歌人」コーナー

東京・南青山にあった旧宅の書斎を移築

▽写真は群馬県立土屋文明記念文学館提供

父・マルセ太郎 そして「イカイノ物語」のこと
〝人間を描くと笑いが生まれる〟

金　竜介

7月に東京と大阪で父マルセ太郎作の演劇「イカイノ物語」が上演された。1999年初演のこの芝居は正月の祭祀（法事）の場面から始まる。在日朝鮮人に法事は欠かせないものだ。父母の親戚がみな関西にいるため、子どもの頃の私は年末年始をいつも大阪のおじの家で過ごした。

見た映画を語る父

正月料理といえば、祖父を祭る屏風の前に並べられた肉、魚、菓子だと思っていたのだが、東京の同級生に聞いてもそんな料理は正月には食べないという。雑煮の餅も私が食べるのとはずいぶんと違うようだ。そのため、私は、あれは東京とは違う大阪の正月料理なんだと大学生になるまで固く信じていた。

この芝居で描かれたシーンにあるとおり、肉と魚の並べ方の左右が違うとか、酒をつぐ順番が違うとかおじさんたちがあれやこれや言うのもおなじみであった。本人たちがはうんざりだが、その姿は外から見ると実に笑えるのだ。

印象に残った劇評

認知症が進んでからは朝鮮語しか話さなくなった祖母が、私の兄の結婚式で新婦が着ているチマチョゴリのドレスを見て急に目覚めて声をかけたことは今でも覚えている。初演の際に「在日を差別してはいけないという演劇を多く見てきたが、在日の家族がうらやましく思えた芝居は初めてだ」という劇評が印象に残っている。

マルセ太郎の死から20年たった今、冬ソナやKポップで韓国の文化と日本は近くなったようだ。しかし、在日の家族が生きやすい社会になったとは私には思えないのだ。

（きん・りゅうすけ　弁護士）

大真面目であるだけに笑えるのである（「やり方を紙に書いて次までとっとけ」との声も毎回あったが、なぜか実践した者はいなかった）。

「笑いというのは面白おかしいギャグではない。人間を描くと自然に笑いが生まれる」というのが、マルセ太郎の持論であった。

父は見てきた映画を自宅で語ることがよくあった。在日朝鮮人を描いたある映画を見て帰宅した父は「とにかく暗かった」と述べ、俺だったらこうやると語り始めたのが、クナボジ（おじさん）の説教の再現シーンである。東京の大学に入ってから田舎の親に顔を見せない若者への説教。実際に聞かされる者にとって

今月の俳句

風の指揮者

丸山　美沙夫

ふるさとは風の指揮者よ青田波

誰が来たれ青田の誘う風の舞

梅雨明けぬコロナ禍晴らす鎌を研ぐ

峰雲へ人生を研ぐ鎌の先

雷雲や疫病を霽す仁王の目

まるやま・みさお　1936年長野県生まれ。俳誌『しなの』代表。新俳句人連盟副会長。現代俳句協会会員。句集『若夏』『樹氷林』ほか

映画

「竜とそばかすの姫」（写真上）

高知県の女子高生すず（声＝中村佳穂）は、幼い頃に母を亡くしてから何事にも消極的です。父（役所広司）との会話は減り、大好きな音楽や幼なじみ（成田凌）を遠ざけます。ある日、親友の誘いでネットアプリの仮想現実の世界「U」に参加。歌姫「ベル」として才能を開花させ一躍スターになり、謎のファイター「竜」と出会います。傷を負ってもたたかう理由を知りたくて、竜に歩み寄ります―。インターネットの世界をめぐり、フェイクニュースや誹謗・中傷が飛び交う否定的な側面はあっても「肯定的な未来へ通じるよう」に描きたかったと細田守監督。知らない誰かのために自分を乗り越えようとする少女のひたむきさを伝えます。全国で公開中。

「復讐者たち」（写真下）

1945年、第2次大戦終結後のドイツ。ナチスのホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を生き延びたユダヤ人のマックス（アウグスト・ディール）は、妻子がナチスに殺されたと知り絶望の淵に立たされます。ナチスの残党をひそかに処刑する英国のユダヤ旅団の仲間となって復讐をねらうマックス。さらに、過激な謀略組織のメンバーとなり、ホロコーストの600万人虐殺に対抗する復讐計画に入り込もうとしますが―。〝目には目を〟の精神で生きることを図ったユダヤ人にわきあがる「本当の復讐とは」の思いを描き出します。イスラエル出身のドロン・パズ、ヨアヴ・パズ監督。東京・ヒューマントラストシネマ有楽町ほかで公開中。

演劇

新国立劇場演劇研修所公演「朗読劇　少年口伝隊一九四五」（写真上）

作＝井上ひさし、演出＝栗山民也。1945年8月6日の広島。原爆炸裂後、かろうじて生きた3人の少年が中国新聞社に口伝隊として雇われます。新聞社も壊滅しニュースは口頭で伝えるしかなかったからです…。出演＝新国立劇場演劇研修所第15期生ほか。ギター演奏＝宮下祥子。8月5～8日、東京・新国立劇場小劇場。☎03（5352）9999（新国立劇場ボックスオフィス）

吉祥寺ファミリーシアター　新作演劇公演「ぞうれっしゃがやってきた」

原作＝絵本『ぞうれっしゃがやってきた』、脚本・演出＝吉田小夏（写真下）。終戦直後の名古屋・東山動物園には、ぞうが2頭いました。戦争の日々を懸命に生き抜こうとした人々と動物たちの姿を描きます。出演＝福寿奈央、藤川修二、大西玲子ほか。8月7～11日、東京・吉祥寺シアター。☎0422（22）0911（吉祥寺シアター）

劇団普通公演「病室」

作・演出＝石黒麻衣。地方の入院病棟の一室。病室での日々の生活や人間関係、人生を全編茨城弁で紡ぎます。出演＝用松亮、小野ゆたか、松本みゆきほか。30日～8月8日、東京・三鷹市芸術文化センター星のホール。☎0422（47）5122（三鷹市芸術文化センター）

音楽

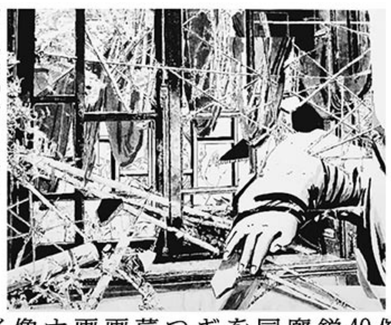
東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団第40回定期演奏会

8月15日午後2時、大田文化の森ホール。指揮＝松岡究（写真上）。演目＝モーツァルト「ディヴェルティメント」、グリーグ「ホルベルク組曲」、ストラヴィンスキー「兵士の物語」。出演＝高橋暁（コンサートミストレス）、松尾香世子（写真下、語り）、印田千裕（ヴァイオリン）、金井清（クラリネット）、伊藤真由美（ファゴット）、梅田直（コルネット）、轟木敬（トロンボーン）、細野理絵（コントラバス）、高山泰利（パーカッション）。☎03（3766）0876（ユニフィル事務局）

被爆ピアノコンサート「平和希求　～受け継ぐことば・うた～」

8月13日午後6時、YouTubeライブ無料配信。朗読＝神足有紀（東京音楽大学修士課程2年）。ピアノ＝寺嶋陸也。栗原貞子「生ましめんかな　原子爆弾秘話」。原民喜「原爆小景」よりコレガ人間ナノデス、日ノ暮レチカク、水ヲ下サイ、永遠のみどり、碑銘。峠三吉「原爆詩集」より序、八月六日。◇平和のうた・こころのうた「長崎の鐘」「一本の鉛筆」「さとうきび畑」「ハナミズキ」「死んだ男の残したものは」「原爆を許すまじ」「鳥の歌」ほか。合唱・ピアノ・ヴァイオリン＝Longing for Peace Ensemble（東京音楽大学学生有志）。指揮＝佐藤洋人。◇ピアノ独奏　フランツ・シューベルト「楽興の時」（全6曲）。ピアノ＝寺嶋陸也。◇フィナーレ　「リメンバー」。☎03（3239）1906（同実行委員会）

美術


芦川瑞季「親和力」（リトグラフ、洋紙　2020）

画廊からの発言　新世代への視点2021

26日～8月7日。東京の銀座、京橋を中心とした8画廊が共同開催する企画。40歳以下の新鋭作家を各画廊が推薦し、同時期に個展を行います。ギャラリーなつか（写真上、芦川瑞季、版画）、コバヤシ画廊（小野ハナ、絵画／映像）、ギャラリイK（和賀碧、インスタレーション）、ギャルリー東京ユマニテ（豊海健太、漆）、藍画廊（衣真一郎、絵画）、ギャラリーQ（吉田花子、絵画）、ギャラリー58（クニト、インスタレーション）、GALERIE SOL（写真下、加藤佑一、鋳金）。主催・東京現代美術画廊会議。問い合わせ☎03（3567）8777

加藤佑一「The ghost in my room」（アルミニウム　2019）

藍画廊　彫刻展「空」

ATSKY　8月20日まで。石、木、金属の作品など。淺井健作、寺田榮、田中毅、田中康二郎、崎間桜雄、木戸修、湯田良夫。天王洲セントラルタワー1階アートホール　東京都品川区東品川2の2の24☎03（5462）8811

岡山九条美術展17

8月3～8日。主催・岡山九条美術の会。岡山県天神山文化プラザ　岡山市北区天神町8の54☎086（226）5005

第69回関西平和美術展

8月3～8日。主催・関西美術家平和会議。大阪市立美術館地下展覧会室　大阪市天王寺区茶臼山町1の82☎06（6771）4874